ISSN 1883-1931

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニューズ

No.33
AUTUMN 2013

台湾の古文書（中野市教育委員会寄託･東江部村山田庄左衛門家文書）

目　次

メッセージ

地方史研究と史料館 …… 松尾　正人　1

研究ノート

天保期幕府老中職と情報管理 …… 大友　一雄　2
宝篋印陀羅尼供養と和歌―金剛寺蔵『宝篋印陀羅尼経』をめぐって …… 海野　圭介　4
当館蔵春日懐紙と祐定懐紙目録 …… 田中　大士　6

トピックス

第6回日本古典文学学術賞受賞者発表 …… 8
第6回日本古典文学学術賞選考講評 …… 8
第37回国際日本文学研究集会　プログラム …… 11
シンポジウム「シーボルトの求めた日本古典籍」の開催 …… 牧野　悟資　13
国際連携研究「日本文学のフォルム」第1回国際シンポジウム …… 小林　健二　13
総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況 …… 14

地方史研究と史料館

松尾　正人（国文学研究資料館運営会議委員・中央大学文学部教授）

日本史学の第二次世界大戦後の顕著な特色は、全国各地の町村史や個人史に至る研究の拡がりであった。著名な人物や行政あるいは企業・団体の年史出版が中心であった戦前に対し、戦後は幅広い市民社会を反映した研究・出版が顕著になっている。しかし、そのような歴史を明らかにする古文書等の史料は、第二次世界大戦中には廃品回収の対象となった。戦後の混乱期には什器宝物類などと共に換金処分を余儀なくされた。特に文書記録は、所蔵者の手を離れると、その多くが「反故」となり、再製紙原料等になって失われたことが良く知られている。

このような古文書等の危機的な事態に直面し、野村兼太郎（慶應義塾大学）が昭和24（1949）年3月、請願者96名の「史料館設置に関する請願」を第五通常国会の衆参両院へ提出した。請願趣意書の冒頭には、「日本の歴史資料は今正に空前の危機に臨んでいます」とある。そして、量と質を世界に誇った歴史資料の多くが「佚失に瀕している」危機について、以下のように訴えた。

「父祖と門地との名誉にかけ、或いは家門と郷土との誇りとして百年数百年保持されていました古文書記録類が、一魁の反故として売買され、刻々に姿を消してまいります現状を黙視するに堪えぬ者は、歴史研究者だけであってはなりません。古文書記録もまた父祖の遺した貴重な文化財でありますばかりでなく、これは世界の民族史料としての重要な文献でありまして、これを遺憾なく保存・利用いたしますことは、日本人に課せられた名誉ある義務でなければなりません。このことは先般ライシャワー博士も指摘せられたところであります。そこで文化国家の建設を日本の至上任務と考える立場の人々は言うまでもなく、いやしくも一国の歴史と文化とに思いをいたす識者は、焚書の刑にも勝る現下の史料破壊現象に対しまして、無関心であることは許されないでありましょう」

貴重な文化財である古文書記録類を保存・利用することが、文化国家をめざす日本、さらには歴史と文化を重んじる「識者」にとって不可欠であると述べている。史料破壊の危機に対して、無関心であることが許されない旨を強調していた。国立の史料保存機関（史料館）を設けて文書の散逸を防止し、保存が困難となった民間の史料を国の力で蒐集するように訴えている。そして、「よろしく国家は、中央・地方に史料館を設置し、緊急に強力な史料蒐集事業を企画せられますように」と、史料館設置を請願したのである。

もっとも、文部省の方でも昭和22（1947）年から学術史料蒐集に取り組んでいた。科学教育局人文科学研究課の中田易直が尽力し、人文科学委員会歴史部会の協力を得て予算要求を行い、学術史料調査委員会が東洋文庫内の文部省分室で史料収集を開始している。翌23年6月には近世庶民史料調査委員会（会長小野武夫、副会長野村兼太郎）が発足。同年10月には、文部省人文科学研究課で史料館（仮称）設置準備協議会を開催している。

そのような中で、野村兼太郎らが衆参両院へ提出した「史料館設置に関する請願」が採択となり、史料館開設が具体化されていく。昭和24（1949）年5月に「文部省設置法」が成立し、その第9条「大学学術局の事務」の中に「史料の蒐集、保存、及び利用に関する事務を処理すること」の一項が加えられた。そして、同年10月には品川区豊町一丁目の三井文庫の建物が「史料館」として購入され、東洋文庫内の文部省分室史料が同館に移され、「史料の蒐集、保存、及び利用に関する事務」が本格的にスタートしたのである。

一方、地方史研究協議会はこの史料館の開設と軌を一にして組織され、昭和25（1950）年11月に設立の第1回大会を開催した。地方史研究協議会の初代会長は、「史料館設置」の請願の立役者となった野村兼太郎である。そして野村は、この第1回大会で「地方史研究について」を講演した。地方史研究協議会の委員には、柳田国男・渋沢敬三をはじめ、有賀喜左衛門、古島敏雄、宝月圭吾、堀江英一、宮本又次、竹内理三、土屋喬雄、所三男など、錚々たる研究者が名を連ねている。いずれも国会に提出した「史料館設置に関する請願」に加わった研究者であった。

その地方史研究協議会は、同会の目的に「各地の地方史研究者研究団体相互及び、それと中央学会との連絡を密にし、日本史研究の基礎たる地方史研究を推進する」ことを掲げている。初代会長となった野村は昭和26（1951）年3月、『地方史研究』の創刊号の「地方史研究協議会の発足に際して」において、同会を通じた研究者や全国諸団体の交流・連携の意義を強調した。中世以降、特に近世においては全く利用されていない根本資料が頗る多いとし、これらの根本資料の踏査、研究はとても一個人の手でなしえることができないと述べた。研究者の相互の連絡によって、多くの人々の研究を周知させることが必要であると書いている。

創刊号の『地方史研究』の「会報」欄では、地方史研究協議会の事務局が文部省史料館に決定したので、今後の通信連絡を同館にする旨を報じている。地方史研究協議会の創設と草創期の運動、それに関係した文部省史料館の活動の一端を知ることができる。

天保期幕府老中職と情報管理

大友　一雄（国文学研究資料館教授）

はじめに

信濃国松代真田家文書は、質量両面で我が国有数の大名文書群の一つである。毎年、多くの研究が発表される状況が続いているが、同文書群は、現在、3つに分かれて伝来する。一つは主に藩庁に伝わった当館所蔵の文書群5万点余、そして、主に真田家に伝来した松代真田宝物館所蔵の古文書・モノ資料2万点余、そして、真田家が最後まで手元に置かれた文書3500点余（当館寄託文書）である。当館収蔵分については、すでに文書目録（『史料目録』）を刊行し、そのデータを利用した「信濃国松代真田家文書」データベース（「収蔵歴史アーカイブズ・データベース」）を公開した。試験的ではあるが一部については文書画像（「家老日記」「目付日記」など）も搭載し、少しずつではあるが、松代藩・真田家関係の研究に貢献できる情報環境を整備しつつある。

また、現在、当館の基幹研究などの実行に関わり、松代真田宝物館所蔵の真田家文書の調査を進めており、両機関の文書・資料を一緒に検索できるデータベース・システムの開発も課題としている。

さて、本報告は、これまでの取り組みの成果を踏まえて、真田家文書のなかに見られる大量の幕府老中職に関する史料群の存在について、幕府老中職の在り方などとの関連で注目したものである。旧稿「天保期幕府老中職にみる公用方役人について」（『松代』第24号、2011年）において、江戸藩邸にあって老中を支えた諸役人（公用方役人）の具体的な検討の重要を指摘し、江戸藩邸での諸役人の設置手続きや役人数、勤務形態、藩役人との関係などについて、天保期を対象に概括的な検討を行ったが、報告ではこれらを踏まえながら、老中関係の文書群のうちでも特に特徴的と考えられる老中日記を手掛かりに、職務情報の集積と情報活用、作成部局の勤務実態について紹介を行った。

（1）真田家に伝来した老中日記と情報管理

真田家伝来の老中日記は真田宝物館に見られ、点数は198点余に及ぶ。これらの蓄積は藩主真田幸貫が天保12年（1841）6月13日から天保15年（弘化元年）5月13日までの間、老中を勤めたことによる。幸貫は老中松平定信の次男で、将軍徳川吉宗の曾孫に当たり、老中就任は天保改革を主導した水野越前守忠邦の推挙によった。

現存する老中日記は、例外もあるが基本的に小振りな横半帳に仕立てられる。具体的な大きさは縦15・3センチ×横22・2センチほどである。水野家など他家でもほぼ同様であり、老中日記の基本的な形態といえる。仕立ては基本的に1か月1冊、表紙の記載もほぼ統一されている。たとえば「天保十年十月　日記　月番中務殿留　信濃守」などと記される場合は、日記が天保10年10月のもので、月番を勤めた中務殿（脇坂中務大輔安董）によって作成され、所持者が「信濃守」（真田幸貫）ということになる。

以上のような表紙情報により現存する日記の作成者を特定したところ、本丸老中24人、西丸老中8人に及んだ（作成者不明3冊）。参考に当該期の老中である水野忠邦家の場合を調べたところ、日記数は400冊、老中18人分（内水野忠邦の老中日記195冊、水野忠精日記48冊）であり、老中日記を多数所持する状況は、当該期いずれの老中にも共通したといえそうである。

蓄積は、後述の通り、基本的に借用の上、書写する形によるが、この実現には、各老中就任者がそれぞれ日記を記すことが必要であり、日記貸借と日記作成は切り離せない関係にある。しかも、借覧先は現職者ばかりか経験者も対象であった。

つまり、老中経験者の家では、老中日記や関係書類を保管し続け、現職老中からの求めに応じて提供できる体制を確保し続けたことになる。日記・記録類が、老中就任者ネットワークのなかで分散して管理される状況といえる。真田家でも老中を退いた後は、老中関係記録を現用的な管理から、他家からの問合せに応え、貸し出すことができる非現用の記録管理への転換が必要となり、最終的には藩の留守居の管理のもとに置かれたことが明らかである。留守居は藩の渉外を担当した役人である。他の家々でも老中職辞任後、同様の管理のもとに置かれた可能性が高い、真田もそれに倣ったものであろう。

（2）日記の収集と活用

老中日記の収集は二つの方法でなされた。①日記を所持する家から直接借りてくる方法と、②他の老中がすでに借り出し書写したものを借写する方法である。真田家の場合、大半は①であり、②による収集は13冊に止まる。②は身近な同期の老中間でのみ実施され、過去の就任者の場合は①の方法によっていた。

注目される収集理由はいくつかあるが、最初の収集は天保12年6月13日、真田幸貫の老中就任当日、新任世話役である師範水野の公用方役人からである。日記の点数は3点、伝達書類29点のなかに含まれていた。この3冊の日記の共通点は、過去の3人の老中の就任時の日記という点である。新任真田への便宜を考えた師範らしい選択である。師範水野の就任時の日記が含まれない理由は、同人の初就任が西丸採用であり、参考になりにくいと判断された結果と思われる。こうした日記の貸借と収集からは、執務運営上、老中

日記が欠かせないものとする指導を師範が行ったこと、日記の作成、日記の共用に関する情報も、就任段階に師範から伝えられたことが考えられる。つまり、職務情報としての利用とともに、作成のための見本として提供されたと判断されるのである。

二度目の日記収集は、天保12年7月7日、江戸殿中で真田が水野から日記を直接借用する形で行われた（「御案詞方　日記」）。冊数は5冊、その内訳は7月非番の日記と、8月当番（月番）の日記であった。これは真田が8月に老中「初月番」を勤めるため、その準備に関わり借覧したものと考えられる。水野家では、自身の日記、他家の借写の日記から、該当する日記を見出し真田に貸与したのである。

日記は、老中の月番担当などの職務に関わり、先行する同内容の日記が計画的に集められ、書写された。月番・非番の違いや作成された月が収集の判断基準となったが、これは幕府の殿中儀礼などの諸行事に関わり、月によって執務内容が異なること、また、月番と非番では役割が大きく異なることなどによる。それぞれの目的から条件を満たす日記が精力的に集められたのである。

その他の収集基準では幕府の事件や出来事に関わり収集することもあった。老中日記が具体的な執務遂行において欠かせぬ情報源と認識されていたことは間違いない。

次に真田の老中関係の記録の内に、日記関連の様々な記録が存在することに注目し、日記情報の活用について、また老中日記の性格・役割について言及を試みた。

注目される関連記録類に、日記見出（記事索引）・日記繰出・日記目録などがある。これは日記情報の資源化、または日記情報の高度活用のためのツールと考えられる。とくに見出しを作成することで、各老中は他家の日記内容情報へのアクセスも容易にした。その結果、いわゆる「老中職の文書群」は「老中共用の文書群」としての性格を充実させたといえる。重要な点はそうしたツール開発が所蔵者以外の家においても行われたことである。さらに日記の記事をもとに様々な備忘録・覚書などの史料集も作成された。また、検索ツールの存在によって、必要情報へのアクセスが格段に改善され、日記全体を書写するのではなく、目的とするものを書き抜く「日記抜書」が広く発生し、さらに史料集（一件、覚書など）が作成された。また、汎用的な情報として日記の中から殿中規式絵図のみを抜き出した絵図集なども作成されたのである。

これらの営為の展開についての検討は不十分であるが、日記として生まれた情報が、様々なアクセスツールの開発を通じて、情報の利活用の仕組みが整い、その結果として目的別の情報集合物の作成が連鎖的に展開したと見てよい。もちろん、それは日記に止まらず、情報が様々に活用される仕組みのなかで理解することが今後の課題となる。

（3）老中日記と公用方役人

次に日記の作成・収集を担当した藩内の老中関係役人について触れておきたい。真田幸貫が老中に就任した当日、師範水野は、公用人4人と右筆、案詞奉行4人程、書翰方3人程と右筆、広間頭取3人程、部屋番3人程と臨時助1・2人、鎰番3人程を、家来の中から任命するように指示した。この他に箱番・手留方・公用方取次などの役人の配置もあり、その人数は全体で50人にも及ぶ規模であった（この役人達を「公用方役人」と称することを旧稿で提案した）。これまでほとんど注目されていないが、老中が執務に専念できるかどうかはまさにこの公用方役人の働きに関わったに違いない。しかし、その多くは藩の役職を兼務する形となっており、勤務上大きな負担となることが少なかった。

日記の作成・収集は、案詞奉行の指揮下にあった「手留方」の担当であったが、真田宝物館には「申立書面案　御案詞方」と表書される紙袋に、手留方の勤務環境の改善を求めた要望書11点が見られる。詳しく紹介する余裕はないが、①手留方は4人で勤めたが、人手が不足し、業務に支障が出ていること、②他の掛りは月番であるが日勤で休みがないこと、③兼務であるため老中職の実状が了解されていないことなどを訴え、兼務勤めの解消を願い出る。こうした主張が見られるのは真田が老中に就任した2ヶ月後程からである。

日記が老中共有の執務情報源であったことを想起するならば、作成の遅延はまさに老中組織全体の危機ということになる。就任から2か月ほどが経過し、担当がそのことを理解し始めたということではなかろうか。

こうした点は公用方役人体制そのものに関わる点であり、制度そのものが矛盾を抱えた存在ということにもなろう。

近代と対比するならば、家来と役人、私的記録と公的記録、自宅と役所などが未分離な状態のなかでの取り組みということになる。当時の役人制度（近世的官僚制）の問題として、日記の以外の記録類の含めて一層の検討が必要といえるのである。

宝篋印陀羅尼供養と和歌
―金剛寺蔵『宝篋印陀羅尼経』をめぐって

海野　圭介（国文学研究資料館准教授）

大阪府の南方、河内長野に位置する真言の古刹、天野山金剛寺に所蔵される重要文化財『宝篋印陀羅尼経』[i]は、消息、今様、和歌などを記した料紙にその上から金泥で経文を書写した供養経で、伝存資料の決して多くはない平安時代書写の和歌・歌謡の資料として夙に注目を集めてきた。鈴鹿三七による複製[ii]、近藤喜博による紹介と料紙和歌部分の翻刻[iii]の後、島谷弘幸による書学の面からの検討と全文の翻刻[iv]、植木朝子による歌謡史からの[v]、中村文による和歌史（歌壇史）からの検討と新編国歌大観への和歌の収録[vi]を経て、その全容がほぼ知られるようになった。近年では小島裕子により和歌・歌謡の歴史を綴る資料としての意義を越えて、平安末期の信仰との関連が問われており[vii]。2012年には、『宝篋印陀羅尼経』そのものを対象としたシンポジウム（「テキストとしての『宝篋印陀羅尼経』とその展開」2012年7月21日 国際仏教学大学院大学）が開催され、その報告書には本資料全体のカラー図版が収められた[viii]。

金剛寺蔵『宝篋印陀羅尼経』は、平安時代末頃（料紙には嘉応2年（1170）の年紀が記される）の書写と推定される小巻の経典で、天地15.5㎝、20枚の料紙を継いで成巻する。料紙には、前から①仮名消息（第1～2紙）、②今様（第3～5紙途中）、③願文（第5紙途中）、④和歌（第5紙末尾～第7紙途中）、⑤結縁文（第7紙後半）、⑥和歌（第8～13紙）、⑦和歌（第14紙）、⑧仮名消息（第15～16紙）、⑨和歌（第19～20紙）が書写されており、一部に白紙部分（第17～18紙）も含まれる。本稿ではこのうち和歌が書き留められた④⑥⑦⑨と④と一連と考えられる⑤について、その資料的性格を考えてみたい。

本資料は新編国歌大観にも収められ、和歌資料としては周知のものであるが、本来的に異なる環境下で成立した和歌を記す料紙を任意につないで陀羅尼を書写するため、連続する和歌は幾つかの歌群に分かれ、隣り合わせた和歌が必ずしも関係性を有するとは限らない。記される50首の和歌は、詠作内容から判断して下記のようにおおよそ4つに分けることができる。

【A】1～7：無常和歌の歌群（末尾に嘉応二年（1170）の寂真による結願文と奥書）
【B】8～44：大井川逍遙和歌の歌群
【C】45～47：伊勢物語和歌
【D】48～50：色紙形和歌

これらのうち、【B】の歌群は、中村文（注vi掲載論文）により、藤原実国（1140-83）と建春門院周辺の文事の記録であることが明らかにされている。【C】は、現時点では『伊勢物語』にのみ共に掲載が確認される3首の和歌を記す一葉で、中に所謂異本歌を含む点で注目される。【D】は、【A】～【C】とは異なる料紙に書写されており、本来的に一具であったかは未詳であるが、和歌を散らし書きする色紙形の上から『宝篋印陀羅尼』を書写している。元来は粘葉装の冊子であったと考えられるが作品名は未詳。残る【A】の歌群は、末尾に次のような結縁文と奥書を記すことから、本資料の供養対象者を考える上でも注目されてきたが、記される「寂真」、「安応聖人」共に未だ具体的な人物比定はなされていない。

君早生九品蓮台、我猶在三途奈落者、必以今日結縁之力、宜［　］当来引尊之媒、縦経生々積世々、今日之契不可知不可忘、

嘉応二年八月十五日　馳疎筆了、安応聖人最末弟砂（ママ）門寂真

物故者の筆跡を料紙として写経を行う供養経の常として、ここに名の記される「寂真」は、確かに本資料によって供養された直接の対象者の最有力候補ではあるが、いかにも僧侶風のその名からすると、本資料の書写形態には聊か不審な点が認められる。それは、本資料の全体に亘って、漢字表記される難読箇所に振り仮名が付されている点である。自身の記した文章を自身の手元に留めるのならば、何も敢えて振り仮名を付す必用はない。もちろん、振り仮名を付した仏書も無いわけではない。『阿字義』（重要文化財、13世紀、藤田美術館）、『弥陀名義抄』（伝久我通親筆、13世紀、国宝手鑑『翰墨城』（MOA美術館）等所収）などは、漢字・平仮名交じり表記された漢字部分に振り仮名が付されている。しかしながら、これらはいずれも装飾料紙に書写された調度本で、一般の僧侶が読むための本ではなく、いずれも高貴な女性のために作成されたと推測されている。これらの事例を勘案するのならば、「寂真」の人物像を考えるに際し、漢字の読み取りに難のある若年者あるいは女人であったというような事情も想定されて良いように思われる（結縁文を見てみると、「君」と称される人物の往生が想定され、自身が已然奈落に留まっていたとしても、今日の結縁の力によって往生が遂げられることが希求されている。聊か印象批評風にはなるが、女性による祈願のように見えはしないだろうか？）。

大井川逍遙和歌の歌群（【B】）が指し示す建春門院周辺といった交友圏と、記録に名を留めない僧侶の名を記す無常和歌の歌群（【A】）という一見矛盾するように見える二つの資料を料紙に用いる『宝篋印陀羅尼経』の性格は、「寂真」の像を上のように想定することによって漠然とながら、後白河院（1127-92）周辺の女人に対する供養経としてその像を結んでくるように思われる。

そもそも天野山金剛寺は、開山である聖地房阿観（1136-1207、初代院主・学頭）とその弟子法仏房覚心（第２代学頭）、天野谷を寄進し金剛寺の財源を担った右馬允三善貞弘、寺辺一円の不輸化に尽くした八条院暲子内親王（1137-1211）とその女房達により当初の整備がなされた歴史を持つ。寺院に伝領された典籍類の施入時期についてはその記録が残らない限り確実なことは言えず、軽率な判断は慎まなければならないが、当該の『宝篋印陀羅尼経』については、料紙に記される和歌から想定されるその成立環境と創生期の金剛寺の歴史とは時代的にも人的にも近しい位置にあると言え[ix]、金剛寺の歴史的位相を伝える資料として見ても不審はない。もちろん、厳密に見るのならば、開山当初の金剛寺と仏縁で結ばれた人々の名を列記する『金剛寺結縁過去帳』[x]に美福門院藤原得子（1117-60）、八条院、宜秋門院九条任子（1173-1238）といった名が記されながらも、大井川逍遙和歌歌群と近しい関係にあった建春門院の名が記されないことは、金剛寺との直接の距離が近くはなかったことを物語っているのかもしれず、本資料の書写と供養について考える際には、女院の文化圏における人的配置と寺社への関与などは今後も継続的に検討されるべき課題となるように思われる。

仏典と和歌は、仏典を供養・賛嘆する場で和歌が詠まれ、また、仏典の説く経旨を和歌のことばに詠み換えるというかたちでながくその関係を保ってきた。仏との結縁を求め行われた経典供養のために和歌が用いられた例は、平安時代後期頃になると記録に現れ、実際の作品も伝えられるようになる。例えば、源俊頼（1055-1129）の家集『散木奇歌集』（844）には経典の表紙（見返しを指すか？）の絵に葦手で和歌を書き入れたことが記されており、11 世紀後半から 12 世紀初頭において既に今日伝来する平家納経（長寛２年（1164）厳島神社へ奉納）の見返し絵のような造作が行われていたことが知られる。

経典に加えて、『宝篋印陀羅尼』を供養し和歌が詠まれる例も見える。永万元年（1165）頃の成立と推定されている『続詞花集』には、「よみ人しらず」として次の一首が記されている。

宝篋印陀羅尼経を供養して、極楽へまゐるべき心を人人よみけるに　　よみ人しらず

けふひらくたからのはこのおしてこそ西へ行くべきしるしなりけれ

（巻十・釈経・457）

これは、永万元年八月十七日以降同二年二月一日以前の成立とされる『今撰集』（206）に「伏見上人」の詠として入集しており、伝未詳ながら伏見に住した僧侶の詠作と知られる[xi]。陀羅尼供養の実際がどのようなものであったのか具体的な様相は窺うべくもないが、詞書に、「極楽へまゐるべき」とあることから、往生祈願の一環として行われていたことが窺われる。

料紙に詩歌の記録を用いて調整された金剛寺蔵『宝篋印陀羅尼経』も、あるいはこうした例のように、詩歌とともに供養されたものであったのかもしれない。和歌が仏のことばと一体となって結縁供養されたように、文事の記録の上に『宝篋印陀羅尼経』を書写する金剛寺蔵『宝篋印陀羅尼経』は、和歌を介した雅事の記憶が仏のことばに変じて供養されてゆく過程を想像させる希有な遺品であると言えるのかもしれない。

［追記］

海野圭介「和歌史における金剛寺本宝篋印陀羅尼経」（『金剛寺蔵宝篋印陀羅尼経』（国際仏教学大学院大学 2013）に、やや詳細に本資料の特質と和歌史における意義について述べた。併せて参照を願いたい。

---

[i] 調査時点（2012 年）では東京国立博物館寄託。

[ii] 貴重図書影本刊行会編『宝篋印陀羅尼経』（貴重図書影本刊行会 1932）。同書には解説（鈴鹿三七）が付される。

[iii] 近藤喜博「天野山金剛寺「宝篋印陀羅尼経」料紙和歌／金剛寺本金字宝篋印陀羅尼の文学について」（国学院雑誌 58-2 1957.6）。

[iv] 島谷弘幸「金剛寺本「宝篋印陀羅尼経」の意義」（『古筆学拾穂抄』木耳社 1997）。

[v] 植木朝子「「宝篋印陀羅尼経」今様について―歌謡における『源氏物語』摂取の一例として」（十文字国文 9 2003.3）。

[vi] 『新編国歌大観』所収「宝篋印陀羅尼経料紙和歌」（中村文解題）、中村文「平親宗（『後白河院時代歌人伝の研究』笠間書院 2005）。

[vii] 小島裕子「金剛寺伝来の『宝篋印陀羅尼経』二本と舎利信仰」（いとくら 7 2011.12）。

[viii] 『金剛寺蔵宝篋印陀羅尼経』（国際仏教学大学院大学 2013）。

[ix] 例えば、『たまきはる』の作者である建春門院中納言（1157- ？、藤原俊成の娘、定家の姉）は、最初、建春門院、後に八条院に出仕している。建春門院や八条院周辺の資料は女房達を介して交換されたり、また金剛寺へと伝えられる可能性も充分にあったように思われる。また、『河内長野市史 5 史料編 2』（河内長野市役所 1975）に翻刻される金剛寺史料「71 八条女院持経目録」（正安元年（1299）奥書）には「宝篋印陀羅尼経一巻」の名が見え、金剛寺に現蔵する二点の『篋印陀羅尼経』との関係如何が注目されるが、同目録自体の成立や金剛寺に伝来された背景、金剛寺伝来の典籍類との関係などについては現時点では判然としない。金剛寺における八条院とその女房達の活動など改めて考えるべき事柄は多いが、今は他に有力な資料を持たない。後考を俟ちたい。

[x] 竹鼻康次「金剛寺結縁過去帳と三善一族関係史料（一）」（河内長野市郷土研究会誌 43 2001）堀内和明「（『河内金剛寺の中世的世界』和泉書院 2012）。なお、『大阪狭山市史 2 史料編 古代・中世』（大阪狭山市役所 2002）にも全文が収められている。

[xi] なお、藤原俊成（1114-1204）の家集『長秋詠草』（227）には、「伏見にてあひしれる僧」のもとで「宝篋経に詩歌供養」が行われた際に寄せた一首が載るが、この「伏見」の「僧」も同一人物の可能性があろう。

当館蔵春日懐紙と祐定懐紙目録

田中　大士（国文学研究資料館教授）

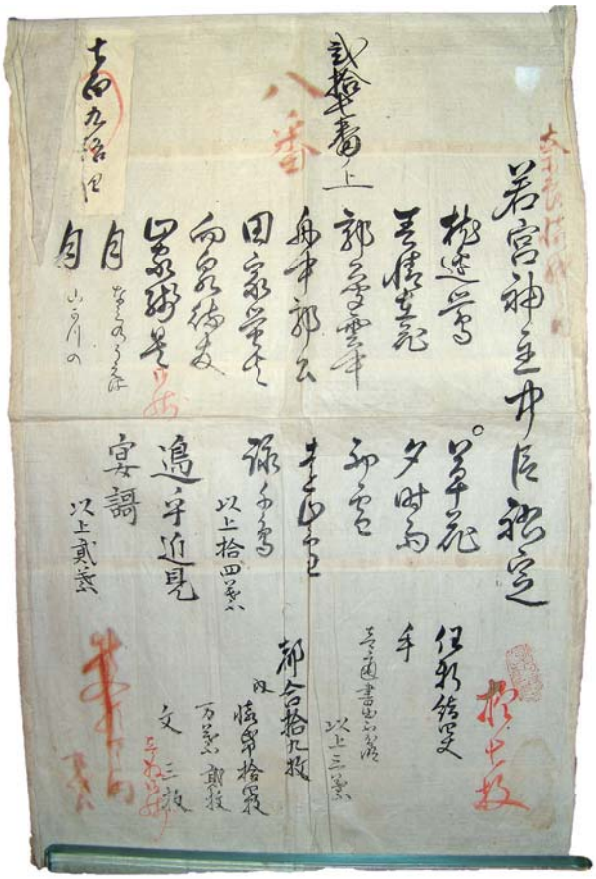
春日懐紙は、鎌倉時代、奈良春日社の神主たちが詠んだ和歌懐紙である。これらの懐紙は、その紙の裏が万葉集書写に利用され、冊子本となった（春日本万葉集〈1243～4年書写〉と称せられる）。ところが、後年再び裏の和歌懐紙の方が注目されるようになり、綴じが外されて和歌懐紙として扱われるようになった。江戸時代には、加賀前田家で保管されていたことが知られている。前田家で保管されていた春日懐紙の総数は二百枚前後であったと考えられ、現在では、そのうち百六十枚程度の存在が知られているが、その多くは一枚ずつ各地に散在している。当館には、30枚の春日懐紙が所蔵されている。公的機関で春日懐紙をまとまって所蔵している事例は、石川県立歴史博物館の17枚と当館の30枚だけである。当館の所蔵懐紙は、現在知られている春日懐紙全体のほぼ五分の一にあたることが知られる。

当館蔵の春日懐紙の内、25枚は平成八年度に購入され、5枚は平成二四年度に購入されている。いずれも前田家から出たものであることには違いないが、両者はいささか出自が異なる。最近購入された5枚については別の機会に紹介することとして、今回は先に購入された25枚の方を話題にしたいと思う。

春日懐紙は、明治以降世上に現れたと考えられる。その際、いくつかの群に分かれて現れているが、そこには大きな特徴が見られる。

イ関戸守彦氏旧蔵　　29枚
ロ松岡三次氏旧蔵　　43枚
ハ大鋸彦太郎氏旧蔵　約30枚

世上に現れた主立った懐紙群としては次の三つが挙げられるが、それらを懐紙作者別で見ると、



『中臣祐定懐紙目録』（北村美術館蔵）

奈良懐紙之内
若宮神主中臣祐定　（印）
拾七枚
1 枕邊鶯　10〇草花　17任科絹四丈
2 春情在花　11夕時雨　18 手
貳拾七番ノ上　3 郭公聞雲中　12初雪　19壱通書出不分明
八番　4 舟中郭公　13遠山雪　以上三葉
5 田家蛍火　14詠千鳥
6 向泉対友　以上拾四葉　都合拾九枚
7 山家残暑御残　内　懐紙拾四枚
8 月なみのうへは　15邊乎近見　万葉　貳枚
9 月　山かつの　16 宴謌　文　三枚
以上貳葉　壱枚御残
（貼り紙）
七百九拾四　新入拾四之内
共袋

イ　大中臣親泰　中臣祐基　大中臣泰清　中臣祐□（不明）

ロ　中臣祐定　縁弁　明算　学詮　素俊　学乗
（他に祐定書状、万葉集）

ハ　中臣祐方　中臣祐有　大中臣泰尚　良胤　泰俊

となっている。イロハの三つの群で懐紙作者が重なる例はなく、春日懐紙は、作者別にいくつかの群になって世上に現れたと推測出来る。当館蔵の25枚の作者はどうかというと、

中臣祐定　縁弁　学詮　明算　素俊（他に祐定書状）

となっている。これは、松岡三次氏旧蔵のロと作者が合致している。ロを調査報告したのは佐佐木信綱氏であるが、氏は、誰の懐紙が何枚とは報告するものの、懐紙題については一切記述していない。それで、ロの内容についてははなはだ不明な点が多いが、懐紙作者がほぼ一致すること、同じく祐定書状が含まれることなどから、当館蔵の25枚は、ロの末裔であることはほぼ間違いないと考えられる。

しかし、これだけでは、両者は、作者は同じものの別々の懐紙群という可能性を完全には払拭出来ない。そこで注目されるのは前頁に示す資料である。これは、北村美術館蔵の祐定懐紙「草花」の「添え状」として伝来されてきたものであるが、内容からあきらかに前田家所蔵の祐定の春日懐紙の目録であることが知られる。ちなみに、中臣祐定（後に祐茂と名乗る）は、春日若宮社の神主で、懐紙裏に万葉集を書写した人物である。左が写真、右がその翻刻である。翻刻の方の懐紙題には、便宜上番号が付してある。この目録によれば、中臣祐定の懐紙は14枚。佐佐木信綱氏が松岡家で調査した時点では祐定懐紙は12枚存していたとされており、目録より2枚少ない。が、そのうちの7「山家残暑」は、春日懐紙作者一人一枚のコレクションに移されたもので所在は明らかであり、もう一枚は、佐佐木氏が同じ報告で他家で見たとしているため、佐佐木氏の調査の段階では祐定懐紙はすべて確認されていたと考えられる。

目録の懐紙題のうち、当館蔵の祐定懐紙と合致するのは、1「枕邊鶯」、3「郭公聞雲中」、8「月なみのうえは」、11「夕時雨」、12「初雪」、14「詠千鳥」の六枚である。祐定懐紙はそれだけであるが、当館所蔵の25枚には、その他に祐定の書状が2枚ある（これらも裏に万葉集が書写されている）。その1枚は、目録17の「任科絹四丈」と合致する（右下図版）。また、もう一枚の書状は書き出し部分の文字が半分に切れており、19「壱通書出不分明」に該当すると考えられる。つまり、当館蔵の祐定懐紙は、前田家の祐定懐紙群から松岡家を経て、6枚の和歌懐紙と2枚の書状が残ったものであると考えられる。

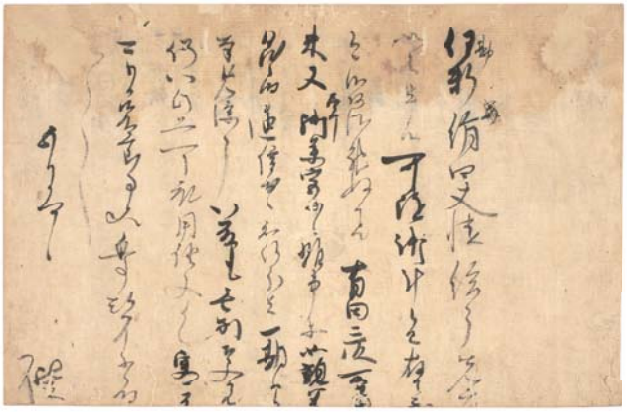
ならば、当館蔵の残りの17枚も、当然の事ながら、ロの松岡家蔵の43枚に含まれていたものと推測される。

では、祐定目録に載る懐紙は現在どうなっているのか。先述のように、「枕邊鶯」「郭公聞雲中」「月」「夕時雨」「初雪」「詠千鳥」の六枚は当館所蔵となっている。残りの八枚のうち、7「山家残暑」は、春日懐紙作者一人一枚ずつあつめたコレクションに採られている（墨跡研究会編『春日懐紙』昭和39年所収）。また、10「草花」は北村美術館蔵、13「遠山雪」は某家蔵。5「田家螢火」は金沢市立中村記念美術館図録（平成11年）に掲載されており、2「春情在花」は、田中塊堂「春日懐紙の研究」に翻刻のみが載っている。懐紙で現在まったく所在が不明なのは、「舟中郭公」「向泉待友」「月・鹿・虫」の3枚のみである。佐佐木氏は、同論文で、松岡家とは別に京都福井家で祐定の三首懐紙を調査した旨述べている（但し、歌題は示されず）。上記不明3枚はいずれも三首懐紙なので、どれと特定することは出来ないが、福井家所蔵の懐紙は、上記3枚のどれかであると考えられる。

なお、中段の左より15「邊乎近見」、16「宴謌」は、裏の懐紙が無く、万葉集だけが残っているもので、前者が巻六の巻末（石川武美記念図書館現蔵）、後者が巻二十の巻末（天理大学附属図書館現蔵）である。いずれも祐定の奥書が存する。下段右の書状は、17，19が当館所蔵であり、18「手」は、現在写真資料が確認されるのみである。

春日懐紙が世上に出たときには、先述のようにあるまとまりをもって出現しているとはいえ、印象としてはばらばらで現れた感が強く、春日懐紙全体でどのくらいの量があるのか漠として把握しきれない不安が存した。また、現れた懐紙を集成して行く時点でも、他にももっと多くの懐紙が存するのではないかという危惧を否定出来ない状況であった。が、祐定の懐紙目録は、春日懐紙の代表的な作者である祐定でも全体で14枚であることを示しており、懐紙群全体の規模を推し量る上でも大きな手がかりを与えてくれる。

※「中臣祐定懐紙目録」の写真掲載については、北村美術館から掲載の許可をいただいた。記して感謝申し上げる。



17「任科絹四丈」＝当館蔵『春日懐紙』（中臣祐定書状）
（請求番号：99-87-4）

第6回日本古典文学学術賞受賞者発表

日本古典文学学術賞は、財団法人日本古典文学会が主催していた日本古典文学会賞を継承し、若手日本古典文学等研究者の奨励、援助を目的として当館賛助会に設置し、平成 25 年度で第 6 回となります。

第 6 回日本古典文学学術賞は平成 24 年 1 月～ 12 月までに公表された日本古典文学に関する論文又は著書を対象の業績として、関連諸学会から推薦された選考委員及び過去の受賞者（日本古典文学会賞受賞者も含む）から推薦された対象者について、論文又は著書を選考委員会で審議しました。

選考委員会における審議の結果、第 6 回の受賞者を一戸（いちのへ）　渉（わたる）氏（慶応義塾大学附属研究所斯道文庫准教授）と光延（みつのぶ）真哉（しんや）氏（東京女子大学現代教養学部人文学科准教授）の 2 名に決定し、平成 25 年 9 月 6 日（金）にパレスホテル立川（立川市曙町）で授賞式を開催しました。

式では、選考委員会の鉄野昌弘委員長（東京大学大学院人文社会系研究科教授）から選考の経緯について報告があり、その後選考委員から受賞者の業績について講評がありました。

受賞者　一戸　渉氏

受賞者　光延　真哉氏

第6回日本古典文学学術賞選考講評

日本古典文学学術賞選考委員会

第 6 回日本古典文学学術賞は、一戸渉氏と光延真哉氏に決定した。

両者の業績は、ともに緻密な考証に裏付けられたものであり、新たな資料に意欲的に取り組んだ研究であり、研究者としての十分な資質を感じさせる将来性を有するものである。

以上の点において日本古典文学学術賞選考委員会は、全会一致で一戸渉氏と光延真哉氏を第 6 回日本古典文学学術賞に推挙した。

＊　　＊

一戸渉氏の受賞対象となった主な業績は、『上田秋成の時代　上方和学研究』（ぺりかん社、2012 年 1 月、A 5 判 471 頁、9030 円）である。本書は、江戸中期、上田秋成と同時代の和学者たち（橋本経亮・礪波今道ほか）の考察を通して、上方和学の動向を詳細に跡づけたものである。（2009 年度に総合研究大学院大学へ提出した博士論文を母体とする）。

氏は、序論で、研究状況を、「秋成の個性が特権化される一方、彼が所属していた当時の上方文壇内における位置付けや、周辺人物との交流については、具体的な解明がやや立ち遅れている」とし、又「秋成以外に同時代の上方で活躍していた和学者たちは、その重要性が指摘されていながら、ほとんど手付かずのままに措かれている」とし、本書執筆の意図を、「秋成と共に、彼と同時代を生き、近世中後期の上方和学を担ったこれらの人物たちの言説、学芸、伝記、学統を総合的に解明することで、未開拓の部分が大きい近世中後期における上方和学の実態を、多角的に把握することを目指す」と記している。以下、三部構成で各章名は以下の通り（各節は略す）。

序論

第一部　上方和学史への試み

第一章　礪波今道と上方の和学者たち
第二章　上方の真淵門
第三章　荷田春満と荷田信郷
第二部　上田秋成の和学
第一章『土佐日記解』の成立
第二章　秋成の校訂―『土佐日記解』自筆本三種を中心に―
第三章　秋成と『土佐日記』
第四章　秋成と好古―天明・寛政期を中心に―
第三部　上方和学者研究
第一章　荷田信郷の雅交
第二章　池永秦良と大坂書林―『万葉集見安補正』の変遷―
第三章　秋成門下越智魚臣とその周辺
第四章　橋本経亮の蒐集活動
第五章　礪波今道年譜稿
資料編　『香果遺珍目録』翻印と影印

第一部・第二部・第三部のうち論文はおよそ280頁、これに「礪波今道年譜稿」（50頁余、著者は第三部の最後尾に置く。年譜として背景を加えた、読み応えのある充実したものだけれども、「資料編」に配置すべきであったとする一部委員の指摘もあった）と、『香果遺珍目録』の翻印ならびに影印を収める「資料編」（100頁弱）を添える。

論文だけを見ると11本、論文集としてはやや微弱の憾みありとの厳評も出たが、氏の年齢と経験を考慮すれば十分なものと見ることができよう。

第一部は、礪波今道・荷田信郷らを取り上げて、江戸中後期における上方和学史の実相に迫ったもの。第三部とも呼応して、彼ら上方の和学者たちが、学統の違いを超えて一つの大きな学問圏を形成していたことが具体的に考証される。それはまさに本書の要諦であり、秋成と同時代の上方和学者たちの動向がここまで詳密に、かつ俯瞰的に描出されたことの功績は大きいと言わねばならない。中でも、今道に着目して真淵学受容のありさまを炙り出した第一部第一章「礪波今道と上方の和学者たち」と、非蔵人である経亮の好古の実態を活写した第三部第四章の「橋本経亮の蒐集活動」は、伝記的事実を初めて明らかにした点、また上方和学者の広がりに着眼した点、さらに文学史の総合化とでもいうべき視座の広がりに対しては、委員全員より高い評価を得た。殊に橋本経亮の蒐集活動と『香果遺珍目録』の紹介は、文学史に新たな展開を与えるものとなろう。橋本経亮への評価が今後一層深まることを期待したい。

対して、秋成そのものへの追究はやや生ぬるいとの印象を持たざるを得ない。加藤宇万伎の注を秋成が補訂した『土佐日記解』を考証して「海賊」への射程を鮮やかに示したり、好古家としての秋成を引き出したりした点は魅力的だが、大局的に見ればそれはまだ微温的な段階に留まっていて、秋成の和学の本丸には到達できていない憾みがある。本書のメインタイトルを「上田秋成とその時代」ではなく、「上田秋成の時代」とした著者のためらいが想像される。「上方和学研究」中心の書と見るべきか。一方、上方和学史へ焦点を当て、秋成研究にも新たな地平を拓こうとしたその姿勢は高く評価されるべきであろう。秋成の古典学の総合的解明へと開花してゆくことが期待される。

なお、対象となる2012年の氏の業績にはほかに、井上泰至氏ほかとの共編にかかる『春雨物語』（三弥井古典文庫、三弥井書店、2012年4月）があったことを付記する。

＊　＊

光延真哉氏の受賞対象となった主な業績は、『江戸歌舞伎作者の研究　金井三笑から鶴屋南北へ』（笠間書院、2012年2月、A5判521頁、12,600円）である。江戸中期、歌舞伎の「黄金時代」の諸相を解明して、それが四代目鶴屋南北など江戸後期の歌舞伎にどんな影響を与えたかを追究しようと試みたもの（2008年度に東京大学大学院へ提出した博士論文を母体とする）。

氏は、現在の研究状況について、「鶴屋南北の研究は数多く行われてきたが、南北の登場までを考慮するという視点は、従来あまり採り入れられていなかった。南北があまりに大きな存在であるが故に、南北のみが特別視され、十八世紀後半の歌舞伎役者の研究が空洞化してしまっているのである」と分析したうえで、本書執筆の意図を、「南北の師である金井三笑に注目することによって、南北をより立体的に捉えるよう試みた。つまり、三笑の活動を軸にして、十八世紀後半の「黄金時代」の歌舞伎の様相をより具体的に解明するとともに、さらにそれが、次の時代の南北へどのような影響をもたらしたか、幕末・明治の資料も視野に入れつつ明らかにする」と述べている。目次は次の通り。

第一部　論文編
第一章　金井三笑

第一節　金井三笑の事績―中村座との関わりを中心に―
第二節　市村座時代の金井三笑
第三節　金井三笑の狂言作者論―『神代椙昧論』と『祝井風呂時雨傘』―
第四節『卯しく存曽我』考
第二章　天明・寛政期の江戸歌舞伎の諸相
第一節　江戸歌舞伎における台帳出版―初代瀬川如皐作『けいせい優曽我』をめぐって―
第二節『春世界艶麗曽我』二番目後日考
第三章　四代目鶴屋南北
第一節　『けいせい井堤蔕』考
第二節　『曽我祭俠競』考
第三節　『四天王楓江戸粧』考
第四節　『東海道四谷怪談』考
第二部　資料編
（一）『卯しく存曽我』台帳翻刻
（二）西尾市岩瀬文庫蔵『柳島浄瑠理塚奇話』
（三）歌舞伎役者の墳墓資料
［別冊］　江戸・明治　歌舞伎役者墳墓一覧

南北の師である金井三笑の事蹟を初めて体系的に、総合的に明らかにした功績は大きく、従来、数少ない歌舞伎作者の研究としても注目すべき成果を示したと評価することができる。

全体は「論文編」（およそ 280 頁）と「資料編」（およそ 180 頁）の二部から構成され、これに別冊として「江戸・明治　歌舞伎役者墳墓一覧」（索引とも 59 頁）を添える。論文だけを見ると 10 本、論文集としてはやや微弱の感をぬぐいきれない。

「論文編」は全部で三章から成る。四代目南北を歌舞伎史に屹立した〈点〉とのみ捕捉するのではなく、南北の師である金井三笑から筆を起こして、十八世紀後半から十九世紀にかけての演劇史を緩やかに、史的に把握しようとしたこの章立てこそ、氏が一番の戦略としたものであった。「金井三笑の事績―中村座との関わりを中心に―」を巻頭に、都合 4 本の論文を配した第一章は、これまで知られることのなかった金井三笑の全貌を引き出して秀逸である。中でも「『卯しく存曽我』考」で、三笑作のそれを検討してのちの四代目南北との共通性を導き出すなど、氏の追跡の眼は実に見事な冴えを見せている。金井三笑という、従来ほとんど表面に出て来ることのなかった人物を浮かび上がらせた点は、現代の歌舞伎界の手法にも一石を投ずるものとなろう。

歌舞伎作者研究の困難さは、第一次資料の台帳の現存するものの少ないこと、また、残された資料があっても、それに正面から向き合う姿勢の研究が未だ本格化していない点である。江戸歌舞伎における台帳出版研究への視点も本書の存在価値へ重みを加えていることは確かである。

著者自らも述べているように、第二章は、第一章と第三章を「橋渡し」（「まえがき」）するものだが、ここに置かれた二本の論文だけで南北前史の江戸歌舞伎の諸相を描き切るのはやや無理があろう。

南北の四作品（『けいせい井堤蔕』『曽我祭俠競』『四天王楓江戸粧』『東海道四谷怪談』）を取り上げた第三章も、師である三笑の影響や「カタリ」と呼ばれる文章の分析などそれぞれの論文で一定の成果は上げているものの、南北研究としてはまだ「とば口」の感が拭えず、やはり物足りなさを覚える。

『卯しく存曽我』の台帳ほかを翻刻した「資料編」は、「論文編」を良く補完したものである。歌舞伎役者の墳墓を集成した「別冊」は、研究者間のみならず、歌舞伎愛好者の掃苔散歩にも一役買うことであろう。労作である。

＊　＊

先に述べた如く、両者の業績には、着実な歩みもあり、研究の姿勢も十全なものがある。しかしながら、あえて誤解をおそれずに言えば、両者の論考には、テキストの面白さ、文芸作品としての解明が目指すところの読者との共感を志向するものが希薄なのではないかと思う。秋成然り、南北然り、「春雨物語」も、「東海道四谷怪談」も、両者の研究によって如何なる新たな光彩を放つのか。今後の課題ではあろうが、本古典文学学術賞が意欲ある若手研究者の奨励と文学史研究への寄与を目的とすることを確認する時、テキストの再評価への文学研究の持つ固有の＜冒険心＞を見せてもらいたいものだと思う。両氏の受賞が、各学会若手研究発表者減少などの声が聞こえる昨今、古典研究の基礎作業の重要さを伝えるとともに、日本文学研究の＜おもしろさ＞を喚起する大きな呼び水になることを期待したい。

（文責　渡辺　憲司）

第 37 回国際日本文学研究集会　プログラム

平成 25 年 11 月 30 日（土）

総合司会　海野　圭介（国文学研究資料館准教授）

【受　付　開　始】　12:00 ～

【開　会　挨　拶】今西　祐一郎（国文学研究資料館長）　13:00 ～

【第 1 セッション】司会　小山　順子（国文学研究資料館准教授）

研究発表

①朝鮮の古時調と日本の古典和歌の対比研究の試み　―自然素材に着目して―　13:10 ～ 13:40
　曺　喜眞（東京外国語大学大学院博士課程）

②『歌舞髄脳記』の諸本をめぐって　―金春禅竹の芸術理論の成立過程を中心に　13:40 ～ 14:10
　Magali BUGNE（ストラスブール大学大学院博士課程）

③有馬晴信のキリシタン語り物「日本に奇跡的に現れた十字架の事」
　―イエズス会日本文学運動の研究序説―　14:10 ～ 14:40
　Patrick SCHWEMMER（プリンストン大学大学院博士課程、国文学研究資料館外来研究員）

【休 憩 （10 分）】　14:40 ～ 14:50

【第２セッション】司会　板坂　則子（専修大学教授）

研究発表

④林家の学術と歴史書の編纂　14:50 ～ 15:20
　武田　祐樹（二松学舎大学大学院博士課程）

⑤井原西鶴『武道伝来記』論の前提を疑う　15:20 ～ 15:50
　井上　泰至（防衛大学校教授、国文学研究資料館客員教授）

⑥『頼豪阿闍梨怪鼠伝』の構造－唐糸の物語を中心に－　15:50 ～ 16:20
　洪　晟準（東京大学大学院博士課程）

【休 憩 （10 分）】　16:20 ～ 16:30

【ショートセッション】司会　相田　満（国文学研究資料館准教授）

①『和漢朗詠集』「仙家」部所収の漢詩文の一考察　16:30 ～ 16:45
　劉　一鳴（早稲田大学大学院博士課程）

②海外における連歌研究の動向と実作者の活動　16:45 ～ 17:00
　生田　慶穂（お茶の水女子大学大学院博士課程）

③芳洲と『荘子』―三教合一論へのつながりを中心に　17:00 ～ 17:15
　康　盛国（大阪大学大学院博士課程）

④〈キャラクター〉からの離脱―細田守『おおかみこどもの雨と雪』における人物表現　17:15 ～ 17:30
　大橋　崇行（岐阜工業高等専門学校助教）

【事務連絡・会場移動】　17:30 ～

【レ セ プ シ ョ ン】　18:00 ～ 19:00

平成 25 年 12 月 1 日（日）

総合司会　神作　研一（国文学研究資料館教授）

【受　付　開　始】　9:30 ～

【第３セッション】司会　伊藤　鉄也（国文学研究資料館教授）

研究発表

⑦西鶴浮世草子の中国語訳についての研究ー銭稲孫訳『近松門左衛門・井原西鶴選集』を中心に　10:00 ～ 10:30
劉　　穎（安田女子大学非常勤講師）

⑧インドに於ける俳句の享受　10:30 ～ 11:00
Imran MOHAMMAD（専修大学大学院博士課程）

⑨ 18 世紀初頭の人形浄瑠璃における新たな演技の共同体　11:00 ～ 11:30
Jyana BROWNE（ワシントン大学大学院博士課程、早稲田大学外国人研究員）

⑩ヤマタ・キクと能―フランスでの能の紹介と翻訳―　11:30 ～ 12:00
常田　槙子（早稲田大学大学院博士課程）

⑪『草枕』と遊仙文学　12:00 ～ 12:30
胡　穎芝（香港城市大学修士課程）

【休憩（90 分）昼食・ポスターセッション】　12:30 ～ 14:00

【シンポジウム】司会　中川　成美（立命館大学教授）

テクスト・ジェンダー・文体ー日本文学が翻訳されるときー　14:00 ～ 16:50

パネラー　呉　佩珍（台湾國立政治大学台湾文学研究所助理教授）
Sharalyn ORBAUGH（ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学部教授）
Chiara Luna GHIDINI（ナポリ東洋大学講師）
小嶋　菜温子（立教大学教授）

【総　　括】　16:50 ～ 17:00

【ポスターセッション発表者】11 月 30 日（土）～ 12 月 1 日（日）（発表者による説明あり）

●忠こその「孝」と「不孝」について
趙　俊槐（北京外国語大学大学院博士課程、国文学研究資料館外来研究員）

●北村透谷試論――『蓬莱曲』を中心に　陳　璐（東京外国語大学大学院博士課程）

●探偵する形をとったマジック的なリアリズム小説ー『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡年の年』論
陳　高峰（愛知文教大学大学院博士課程）

●『伊勢物語』六十二段とその周辺ー朱買臣説話との比較を通してー
潘　明昭（南京大学大学院修士課程、奈良女子大学大学院交換留学生）

●続・中島敦「山月記」材源論：『論語』との関連　頼　衍宏（銘伝大学助理教授）

●『とりかへばや物語』論―日中比較文学の視点から―　庄　婕淳（立命館大学大学院博士課程）

シンポジウム「シーボルトの求めた日本古典籍」の開催

国際共同研究「オランダ国ライデン伝来のブロンホフ、フィッセル、シーボルト蒐集日本書籍の調査研究」は、人間文化研究機構の「人間文化にかかわる総合的研究推進」の一環である「日本関連在外資料の調査研究」の研究課題「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」の一つのカテゴリーとして、平成22年度から開始され、国文学研究資料館を中心に、国内外の研究者と調査・研究を進めてまいりました。主な目的は、シーボルトが、出島のオランダ商館医として来日した1823年（文政6年）8月からシーボルト事件によって国外追放を言い渡されて離日した1829年（文政12年）12月までに日本国内で蒐集し、オランダに持ち帰った日本書籍（但し、後にフランス・オーストリア・イギリスに売却されたもの、シーボルトが自分のコレクションに移管したオランダ商館長ブロムホフ及び商館員フィッセルの旧蔵書も含む）の追跡調査、それによって得られたデータの蓄積、さらには目録を作成することによって、その総体を明らかにし、そこから浮き彫りにされる、各資料の伝来経緯やジャンル的傾向などといった個々の問題の解明を試みることです。

本シンポジウムは、約四年にわたる調査・研究のいわば集大成の一つになります。発表内容は、全てシーボルトが日本で蒐集した日本古典籍に関わるものとなります。発表者と発表題目（仮題）は、

・鈴木淳（国文学研究資料館名誉教授）
「シーボルトが蒐集した日本書籍コレクション」
・クリストフ・マルケ（日仏会館フランス事務所所長）
「フランス国立図書館に所蔵されているフィッセルとシーボルト旧蔵の和本について」

その他、俳書、狂歌本、草双紙、医学書などの発表も予定しております。ご関心のある方は是非ともご参加ください。

日　　時：平成25年11月8日（金）13：30～17：00
平成25年11月9日（土）10：30～15：45

場　　所：国文学研究資料館2階オリエンテーション室（B210）

注意事項：時間帯の変更等がある場合がございます。参加希望の方は、下記のお問い合わせ先までご連絡ください。
【お問い合わせ先】シーボルト研究事務局（牧野悟資）
E-mail : satomaki@nijl.ac.jp

国際連携研究「日本文学のフォルム」第1回国際シンポジウム

国文学研究資料館ではこれまで「国際日本文学研究集会」を毎年開催し、また世界各地で実施される共同研究をとおして、海外の研究者との交流をはかってきました。その従来の活動を踏まえて、さらに発展させるべく、学術交流協定を締結している海外の諸機関や大学との間で、あらたに国際連携の共同研究「日本文学のフォルム」を立ち上げました。その第1回の国際シンポジウムを以下の要領で行います。共同研究の代表は伊藤鉄也教授で、第1回のコーディネイトは小林が担当いたします。

○テ　ー　マ：もう一つの室町―女・語り・占い
○日　　時：平成26年1月11日（土）13：30～17：00（予定）
○会　　場：国文学研究資料館大会議室
○パネリスト：コロンビア大学　ハルオ・シラネ
パリ第7大学　マティアス・ハイエク
国文学研究資料館　恋田知子
○コメンテーター：明知大学　崔京国
甲南大学　田中貴子

このシンポジウムでは、日本の室町時代から江戸時代にかけて、女性や民間宗教者がどのように文芸や文化の形成と展開に関わってきたかを多角的に追求いたします。事前の申し込みは不要、入場も無料ですので、興味のある方は是非ご参会下さい。

（小林　健二）

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

○入学者募集
平成 26 年度の入学者を、以下のように募集します。
【平成 26 年度入学者募集】
〔概　要〕課程：大学院博士後期課程、学位：博士（文学）、募集人数：3 名
〔願書受付期間〕平成 25 年 11 月 29 日（金）～ 12 月 5 日（木）
〔選考方法〕修士論文等の審査、面接（平成 26 年 1 月 30 日、31 日予定）

また、平成 25 年 10 月 26 日（土）13 時より、当専攻の入試説明会を行います。

入試説明会では、当専攻や入学試験についての説明の他、大学院生が使用する施設、普段入れない書庫の見学、特別講義「漱石と英国史」(野網摩利子国文研助教) の聴講ができます。ご関心のある方は、当館 Web ページ「総研大日本文学研究専攻」の「お問い合わせ先」よりお申し込み下さい。またお申し込みなしでのご来館でも結構です。多数のご来館をお待ちします。

○修了生便り「修了から現在まで」

筑紫女学園大学文学部　准教授　大内英範

わたしが総研大日本文学研究専攻の１期生として学位を取得してから、６年あまり経ちました。いまわたしは福岡県太宰府市にある筑紫女学園大学の文学部に勤務しています。専攻に在籍していたときは、総研大の援助もいただきながら、さまざまな場所でフィールドワークをかさね、現在の研究の基礎を作ることができました。

ただ、学位を取得しても、その後の就職について組織的にサポートしてくれる体制はありません。幸いわたしの場合は国文研の機関研究員に採用していただき、細々とつなぐことができました。機関研究員の任期終了後は博士研究員という無給のポストに就き、非常勤の仕事を４か所で掛け持ちしていました。

そうした生活も長く続けることはできないと思っていましたが、幸いにして在学時の指導教授の個人的な紹介を受け、東京大学史料編纂所に歴史情報処理担当の特任助教として着任することができました。歴史情報処理システムの研究のほか、サーバ等をはじめ、所員の使用するリース機器をふくむ情報関連機器の管理･運用が仕事でした。ときどき、史料編纂所が伝統的に行っている「採訪」といわれる史料調査に同行し、ふだんあまり見ることのない史料を手に取ってみることができたのは、貴重な経験でした。

史料編纂所での２年半の任期が終わり、本年の４月から現職に就きました。公募への応募で得た職で、専任の准教授ですが任期がついています。単身赴任で週末に東京に戻る生活をしています。授業は１年生のものから４年生の卒論まで、教職課程もふくめてまんべんなく担当しています。素直でまじめな学生が多く、やりがいを感じています。毎日毎日授業準備と小テストやレポートの採点に追われながら、オープンキャンパスや入試説明会、高校への「出前授業」などの仕事もあり、忙しいです。そのほかに論文執筆や調査などの時間も見つけなくてはなりません。まだサイクルに慣れきっていないこともあり、バタバタすることも多いです。前期を終え、自分なりに反省もしながら、後期の授業を一層充実させていきたいと考えています。

筑紫女学園大学外観

閲覧室カレンダー　2013 年 11 月～2014 年 1 月

■青は休館日　■黄色は土曜開館日

11 月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

12 月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

1 月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

●開館　9：30 ～ 18：00　●請求受付　9：30 ～ 12：00　13：00 ～ 17：00　●複写受付　9：30 ～ 16：00

ただし、土曜開館日は、

●開館　9：30 ～ 17：00　●請求受付　9：30 ～ 12：00　13：00 ～ 16：00　●複写受付　9：30 ～ 15：00

第八回全国大学国語国文学会賞受賞

当館の野網摩利子助教が、「第八回全国大学国語国文学会賞」を受賞しました。

同賞は、全国大学国語国文学会が創設した、若手・中堅の研究者を対象とした学会賞で、近代文学の分野での受賞は初めて。受賞対象作は、『夏目漱石の時間の創出』（東京大学出版会 2012 年 3 月 22 日刊）。漱石の小説の登場人物には、それぞれに異なった記憶があり、それが作品内に異なった時間を生み出しているという先鋭な分析とそれらを漱石自身の『文学論』と引き合わせるという精緻な論の作りが高く評価されました。

表紙絵資料紹介

中野市教育委員会寄託・東江部村山田庄左衛門家文書

2013 年 10 月 18 日から 22 日にかけて当館で行われる企画展示「周流する記録 – 長野で発見された台湾の古文書 –」で展示される清朝の道光 10 年（1829 年）の古文書。2003 年、当館と中野市教育委員会との共同で行われた長野県中野市山田家文書調査の折に柿渋を塗った渋紙の中から清朝後期の文書が多数発見された。台湾においては清朝後期の文書記録が少ないことから注目されている。内容は 2 人の台湾人を殺害した人物に対する逮捕の地方行政文書である。なお、山田家文書は当館にも所蔵されており、山田家文書の概要や渋紙文書の詳細については当館の『史料目録　信濃国高井郡東江部村山田庄左衛門家文書』（その 1 ～その 3）及び高橋実「長野県中野市で発見された渋紙文書調査報告と今後の課題 -19 世紀中葉台湾文書と 19 世紀末日本文書について -」（『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』第 4 号）を参照されたい。

（西村慎太郎）

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町10-3
Tel.050-5533-2910　Fax.042-526-8604

発行日　平成25年（2013）10 月 18 日
編　集　国文学研究資料館広報出版室
印刷所　三鈴印刷株式会社
©人間文化研究機構国文学研究資料館

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。